

不安を取り除く真理の霊

ヨハネ14:8~17、25~27 / 李正雨師

世の中で心配なく生きている人はいないと思います。これを逆に言えば、人々は不安と心配を持って生きているということでしょう。最近のニュースを見ると、20代の青年の中で約7割くらいが未来への恐怖を持っているそうです。面白いのは、韓国もこれと同じだということです。世の中の多くの青年たちは、未来への漠然とした恐怖を持って生きています。社会が彼らに求める基準は高まっていて、このような社会で借金、職場、結婚など、多くのことを準備しなければならない状況が、彼らをより恐れさせていると思います。今、考えてみると、私もそうでした。牧師になるために神学院まで進学しましたが、一寸先も見えない未来が自分を不安にしました。では、今、牧師になって日本で牧会をしている私には、未来への不安や心配がないのでしょうか。そうではないでしょう。青年の時とは違う心配が山のように積み上がっています。ある調査によると、日本人の9割くらいが未来への心配と不安を持っているそうです。そしてこの調査は、青年に対するものではなく、私のような中年を中心にした調査です。子供、コロナ、健康、職場、安全事故、国際関係、地球温暖化まで…むしろ若者よりも心配や不安を持って暮らしています。社会的な経験が積もれば、積もるほどより多くの心配をしているのです。

ところが、これをご存知でしょうか。このような心配が私たちの生活の中で実際に起こる可能性は、わずか2%程度だそうです。私たちが心配していることの98%は、実現される可能性がないのに、私たちは起こるかもしれないことに縛られて生きているのです。しかし、この2%しかないことの力は、ものすごいです。私たちの9割を心配させ、青年たちの7割に未来への恐怖を植え付けさせます。そして、これがひどくなると、phobia、つまり恐怖症という病も生じます。どうすれば、私たちはこの不安と恐怖から逃れることができるでしょうか。完全に自由になることはできないといっても、ある程度、これを減らすことができたらいいと思います。

今日の福音書では、不安と恐れに包まれている弟子の話が書かれています。そして、この弟子はイエス様にとんでもないことを要求します。今日の福音書8節の言葉です。「フィリポが『主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます』と言うと。」フィリポはイエス様に御父、つまり神様を示してくださいと求めています。私たちににとってのこのような要求は、普通なことかもしれませんが、ユダヤ人にとってのこの要求は、あり得ないことでした。先週の説教でエルサレム神殿について少し分かった合いましたが、大祭司だといっても、至聖所には1年に一度、贖罪の日だけにしか入ることができなかつたと申しあげました。なぜなら至聖所という所は、神様と出会う聖なる所だったので、罪のある人は入ることができなかつたからです。それでユダヤ人たちは、罪のある人が神様と出会うことは、大きな災いだと思いました。これは、旧約聖書イザヤ書6章に書かれています。ところが、今日の福音書でのフィリポは、イエス様に神様を示してくださいと求めています。ユダヤ人としては、すべきでない要求でした。それでは、なぜフィリポはこのような要求をイエス様にしたのでしょ

うか。私は、このような要求は不安によって起こったことだと思います。フィリポは不安を抱いていました。今日の福音書の前の章である13章を見れば、イエス様は弟子たちの足を洗われ、弟子たちの一人がご自分を裏切ると言われます。そして今日の福音書の前の箇所では、ご自分は弟子たちを離れると言われています。このすべてのことは、弟子たちと福音のためでしたが、当時弟子たちはイエス様のこの言葉を理解することができませんでした。それで、トマスは「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません」と言い、フィリポは御父を示してくださいと求めると言ったのです。これはフィリポの不安を表していて、このような不安は、フィリポにイエス様の教えと御業さえも忘れさせました。そのため、彼はユダヤ人としては想像もできないことをイエス様に求めたのです。何か確かにしてくれること、頼ることができることがフィリポには必要だったからでしょう。

たぶん、このような要求は、人間的で当然のことだと思います。不安を解消するためには、何か確実なことが必要ですね。しかし、イエス様はこの要求の答えとして、信仰を語られます。今日の福音書9-14節の言葉は、フィリポの要求についてのイエス様の答えです。この言葉は説得と説明と慰めの言葉、約束などで書かれています。まとめてみると、信仰についての言葉です。イエス様は、フィリポに信じるのが不安を解決することだと答えられたのです。皆様、一度考えてみてください。もしイエス様がフィリポの要求を聞いてくださったら、神様や神の力を見せてくださったら、フィリポの不安は無くなったと思うのでしょうか。その時には大きな助けになったでしょう。しかし、時間が経ったら、他の不安と恐れがフィリポを訪れるでしょうし、これによってフィリポは、自分の願いが叶えられたことも忘れてしまうのだと思います。

ヨハネによる福音書13章37~38節には、イエス様とペトロの会話が書かれています。イエス様は、ご自分のために命を捨てると言っているペトロに、「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」と言われます。ペトロは、イエス様の神的な姿を見たり、奇跡も経験したりした人でした。イエス様がモーセとエリヤと共に話し合ったことを見た人、イエス様の言葉に従って水の上を歩いた人がペトロでした。しかし、イエス様の言葉のように、ペトロはイエス様を三度も知らないと言いました。これは人間はどれほど弱い存在かを示してくれる出来事です。フィリポも同じだったでしょう。イエス様が神様を示してくださるとしても、フィリポの不安と心配は解決されなかったのだと思います。フィリポの不安を解決できるのは、ただ一つ、信仰でした。信仰がフィリポを導き、信仰がフィリポを祈らせ、信仰がフィリポを満足させるのです。要求を聞くだけでは、何の役にも立たなかったでしょう。それでイエス様は、神様を示してくださいというフィリポの要求に、信仰のことをおっしゃったのだと思います。信仰が不安や心配から自由にしてくれるからです。そして、そのためにイエス様は聖霊を遣わされると言われます。16節の言葉です。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。」

ここで、弁護者は原語でパラクレートス(παράκλητος)と言います。「パラ」は「そばに」という意味であり、「クレートス」は招く、助ける、教える、慰めるなどの意味があります。そばに招かれた方、そばで教えて慰める方がパラクレートスなのです。そして17節で、イエス様はこのパラクレートスを「真理の霊」、すなわち「聖霊」と言われます。聖霊は、16節の言葉のように永遠に弟子たちと共におられるのです。弟子たちを教えられ、慰めてくださるのです。弟子たちが心配ばかりしていないように、不安だけに包まれないように、助けてくださるのです。また、聖霊は弟子たちと共におられ、イエス様が話されたことをことごとく思い起こさせてくださるのです(26節)。弟子たちが信仰を失わないように、イエス様の働きを続けて行われるように、導いてくださるのです。そして弟子たちは、この信仰の中で、不安と心配ではなく平和を享受するのです。今日の福音書の最後の言葉である27節の言葉です。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」

この世で生きている私たちに、多分不安と心配は、切っても切れないものかもしれません。そして、これは当時の弟子たちにも、今日の福音書を初めて読んだ読者たちにも、同じだったでしょう。ローマによって搾取され、ユダヤ人によって迫害された彼らにも、不安と心配はいっぱいだったと思います。だからイエス様は、ご自分のすべての弟子たちに平和を与えられることを願われました。ご自分の平和がすべての時代の弟子たちを自由にするように、弟子たちが心配と不安から逃れるように願われました。それで聖霊を遣わされたのであり、聖霊は今も私たちに共におられるのです。聖霊降臨の主日である今日、イエス様は私たちに聖霊をお遣わしになりました。そしてその聖霊を通して、私たちはイエス様の平和を味わうことができます。世の中が与えられない平和、世界が知ることのない平和が私たちの中にあります。この平和の中で、不安になることも、恐れることもない皆様になりますように祈ります。アーメン